

審査の結果の要旨

氏名 三野 豊浩

本論は南宋を代表する詩人・陸游(1125-1210)の生涯と作品に関する論考である。第一部は、陸游と並び南宋を代表する詩人である范成大(1126-1193)との交流を軸に、陸游の生涯を概観する。両者は四十歳になる少し前、首都臨安で知遇を得ていたが、最も濃密に交流したのは、淳熙二年(1175)范成大が四川制置使として成都に赴任し、周辺の小都市で知事代行などの職に従事していた陸游を、幕官として招いてからの数年であった。両者は、地位に大きな隔たりがあり、陸游が幕官の職を免ぜられるという曲折を経ながらも、故郷を遠く離れた蜀の地で、詩友として親しく交わった。淳熙四年(1177)范成大が成都を離れた後、二人が再び親密に交際する機会はなかったが、陸游は最晩年に至るまで、成都での日々を懐かしみ、范成大を数少ない友の一人として詩に詠んでいる。三野氏は二人の残した詩文を丁寧に読み解き、他の資料と合わせ交流の軌跡を詳細にたどった。そして二人の精神的紐帯は、時に複雑な色合いを帯びながらも、友情と呼ぶにふさわしいものであったと述べ、陸游にとって、自己とは異質の個性を持つ詩人范成大との交流は、その詩人としての成長に大きな影響を及ぼしたと結論付けている。

第二部は、雨を詠う詩人という視点から、陸游の作品に考察を加える。宋代の詩人は、前代までの詩人に比べ、雨を好んで詠うことが指摘されており、とりわけ陸游は多くの詠雨詩を残したことで知られるが、雨の詩に焦点をあてた陸游研究はほとんど行われていない。陸游は七十七歳の時の詩に「自分の作で、最も多いのは夜雨の詩である」と詠っている。夜の雨は聴覚で捉えられる。三野氏はこの詩句に着目し、軒から滴る微かな雨音、竹の葉を打つ激しい風雨など、夜の雨音に耳を傾けるという詩の系譜を、年代を追ってたどった。その結果、成都から故郷に帰った五十五歳頃まで、陸游の詩は悲憤慷慨を主調とし、雨を聴くという主題はまだ明確に打ち出されていないことが明らかになった。その後八十五歳で没するまで、大半の時間を故郷の村で過ごす中で、夜の雨は繰り返し詩に詠われ、雨に導かれる省察は、時を追って陰影をましていく。

次いで三野氏は「孤村」などいくつかの詩語を取り上げ、それらの伝統的用法と、陸游における意味との差異を探った。そして陸游の詩においては、雨とともに描かれるという過程を経て、その語によって表わしたいものが次第に明らかになり、陸游独自の詩的表現が生まれるに至ったと結論付けた。陸游は、雨音に耳を澄ますことで、その時々自分の心と向かい合い、その奥底にあるものを詩に掬いとることの出来た詩人であったと三野氏は述べている。

本論は、個々の作品の鑑賞になお不十分な箇所が見られるが、范成大との友情をかつてない細やかさで再構築するとともに、愛国詩人とのみ呼ばれることの多い陸游にとって、詠雨詩がいかなる意味を持っていたかを初めて明らかにしたという点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。